

テーマ

9 鉄器の出現は社会をどのように変革したか

森 貴教

はじめに

本稿では鉄器の出現について、石器生産・流通との関連性の観点から通時的に概観することを通して、本課題に接近したい。鉄器出現と社会変容という事象を二つの時期的な側面、すなわち①鉄器の出現と②利器の材質変化（鉄器化）を捉えることで、長期的な変化過程について言及する。前者は弥生時代前期末から中期初頭における鑄造鉄器の破片利用であり、後者は弥生時代後半期（中期後半から後期）における鍛造鉄器の普及である。

1 鉄器の出現：倭人と鉄器の邂逅

日本列島において鉄器は弥生時代に出現した。福岡県曲田遺跡出土の板状鉄片や熊本県藤山遺跡出土の鑄造鉄斧については、出土状況や所属時期などの点で疑義が呈されており議論が続いている。所属時期が明らかなものとしては弥生時代前期末から中期初頭の舶載鑄造鉄器がある。片刃石斧をはじめとする大陸系磨製石器と縄文文化的系譜の石器群を主たる生産活動の道具としていた倭人は、この時期に鉄製品の存在を知った。

これらの鑄造鉄器の多くは、基部に二条の突帯をもつ鑄造鉄斧の破片である。脱炭処理が施された鑄造鉄器の破片を砥石で研磨することにより、小型の加工斧として再利用されているものが目立つ。日本列島における初期鉄器は、鑄造鉄器の破片を再加工した木工具（板状鉄斧・鑿・鉋）が主体であったと考えられる。またこれらの鉄器の大半は袋状土壙、竪穴住居址などの集落域から出土する。このことは、鑄造鉄器の破片が実用品として認識され、利用されていたことを示している。

ところで、弥生時代前期末から中期初頭の北部九州地域では、今山の太形蛤刃石斧に代表される石器生産の最盛期であり、福岡県小郡市三国丘陵地域を中心として非常に高密かつ広範囲に流通する。また木工具としていわゆる「層灰岩」製の片刃石斧が大量に流通している。この石材は主に扁平片刃石斧・鑿形石斧に用いられており、鑄造鉄器の破片を利用した再加工作品に長さや幅が近似し

ている。このことから鉄器は磨製石器の使用法に即した形で部分的に導入されたと考えられる。

弥生時代開始期から前期を通じて磨製石器の使用石材と石器の器種が固定化していく。すなわち太形蛤刃石斧の石材として今山周辺の玄武岩（今山系石斧）、片刃石斧の石材として「層灰岩」、穂摘具である石庖丁に笠置山周辺の凝灰質泥岩（立岩系石庖丁）が採用され、特産品（製品）として広域的に流通するようになる。石器の生産の側面において石材産地の開発と共同体間の分業化が進み、小地域の核となる集落を結ぶ流通網がより一層整備される。鑄造鉄器の破片はこのように展開していた石器生産・流通に、融合するように導入されたといえる。いわばこれらの鉄器は「よく切れる石器」として磨製石器と同様に扱われたと考えられる（笹田朋孝氏との議論による）。

2 利器の材質変化：砥石研究の成果から

日本列島において鉄器化は弥生時代後半期（中期後半から後期）に生じたと考えられている。しかし、石器や土器と比較して残存状況が悪い鉄器の普及を実証的に論じた研究は必ずしも十分ではなかった。資料の制約から、分析の側面においては石器の出土量の変遷や器種組成の変化に基づく「みえざる鉄器」論が中心となってきたといえる。

そのような状況のなか、加工具である砥石に着目して研磨対象物の鉄器化を具体的に把握しようとする研究がなされはじめた。砥石は時期や地域を問わず集落遺跡において普遍的に出土する遺物であることから、分析資料数を確保できる。また鉄器と異なり、土中で腐朽・銹化したり溶解されて無くならないという材質上の利点がある。

禰亙田佳男は石器組成から近畿地方における鉄器の普及度を検討し、弥生時代中期後半に砥石の量が増加すること、「目の細かいものが多数を占めている」ことを指摘した。そして「砥石の増加は磨製石器用の砥石に鉄器用の砥石が加わったため」と捉えた（禰亙田 1998）。ただし研磨対象物の推定や粗砥、中砥、仕上砥といった砥石目（砥

石粒度)の区分などについては課題となっていた。

こうした研究状況のなか2002年に村田裕一は、形態、使用痕といった砥石の諸属性を整理し分類基準を提示した上で、弥生時代における砥石使用形態の時期的変遷について検討した。特に、サンドペーパーを指標として砥石目を客観的に提示する方法を確立した点は重要である(村田2002)。

近年は、村田により提示された分析方法をふまえて一遺跡、小地域内における砥石の詳細な分析が進展している。筆者は長崎県カラカミ遺跡(弥生時代中期～後期)出土の砥石の分析をもとに、弥生時代における鉄器化と石器の生産・流通の変化について検討している(森2013)。カラカミ遺跡においては弥生時代中期後半に砥石目が細粒化しており、数量は僅少であるが鉄器を研磨した際に生じたとみられる使用痕が認められるものも含まれていた。さらに、当遺跡において石器生産の痕跡はもとより磨製石器が基本的に存在しないこともふまえると、鉄器の研磨の頻度が相対的に高い状況を想定できる。しかし弥生時代中期後半は、北部九州地域において立岩系石庖丁の生産・流通の盛期にあたる。このことから鉄器化の進行は器種に応じた漸移的なものであったと評価できる。

また、弥生時代中期から後期にかけて定型的な砥石や鉄器を研磨した際に生じたとみられる使用痕が認められる砥石の増加が確認された。定形砥石はカラカミ遺跡の周辺では採取できない泥岩・頁岩を素材とするものが大半であり、壱岐島の外部から搬入されたとみられる点は当該期における流通について考えるうえで非常に重要である。筆者の肉眼観察によれば、北部九州地域の弥生時代中期末から後期の遺跡においても、カラカミ遺跡出土のものに類似する青灰色を呈する泥岩・頁岩製の定形砥石が出土している。さらに朝鮮半島南部、金海^{クサンドン}・龜山洞遺跡や泗川^{ヌクト}・靑島遺跡でも酷似する砥石が散見される。定型化し、非常に細粒の砥石が製品として広域的に流通したと推察される。

ところで、弥生時代中期後半から後期における生産・流通の評価についてはいくつかの異なる見解がみられる。寺澤薫は鉄素材や鉄製武器が石器の流通システムに乗って流通したと評価している(寺澤2000)。前述したように弥生時代前期末か

ら中期初頭における鑄造鉄器とその破片の導入に関してはその可能性が考えられるものの、砥石の分析に基づく、弥生時代後期には流通内容に鉄器の消費過程が不可分に埋め込まれた状況になっている。他方、野島永は北部九州地域において鎌・摘鎌・鉄斧の生産・普及にも関わらず、弥生時代後期後半まで石庖丁や石斧などが残存する状況から、石器と鉄器がそれぞれ別々の交換領域をもってたと推定している(野島2000)。しかし、弥生時代後期以降における石器の生産・流通の様態は中期以前のそれとは質的な差異があり、新たな地域間関係に基づくものと考えられる(土屋2004)。

おわりに

本稿では、鉄器の導入と石器生産・流通の関係性について通時的に検討した。鑄造鉄器の破片が再加工作品として利用された弥生時代前期末から中期初頭は石器生産の最盛期にあたり、鉄器は石器を補完する素材として認識されていたと考えられる。弥生時代中期後半から後期にかけて鉄器化が進行し、定形砥石の広域的な流通にみられるように鉄器の消費活動が大きく作用する状況へと変化する。鉄器の出現が直接的に社会変化を促したのではなく、道具体系のなかでの位置付けの変容が漸移的に生じたといえる。また、弥生時代後半期における質の異なる道具の調達システムも「結果的に」発現したものといえるのではないだろうか。

参考文献

- 土屋みづほ 2004 「弥生時代における石器生産と流通の変遷過程—東北部九州を中心として—」『考古学研究』第50巻第4号、34-54頁
- 寺澤 薫 2000 『王権誕生』日本の歴史2 講談社
- 瀬田田佳男 1998 「石器から鉄器へ」都出比呂志編『古代国家はこうして生まれた』角川書店、51-102頁
- 野島 永 2000 「鉄器からみた諸変革—初期国家形成期における鉄器流通の様相—」『国家形成過程の諸変革』シンポジウム記録2 考古学研究会、75-102頁
- 村田裕一 2002 「工具—砥石」北條芳隆・瀬田田佳男編『考古資料大観 第9巻』小学館、197-200頁
- 森 貴教 2013 「カラカミ遺跡出土砥石の検討」宮本一夫編『壱岐カラカミ遺跡IV』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室、169-182頁